

台湾総督府（現總統府）周辺

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。名実ともに台湾の中核となっている大都市である。その台北の歴史をたどる旅。今回は日本統治時代の最高統治機関である台湾総督府を紹介したい。現在は總統府となっており、日本統治時代の庁舎は今も使用されている。壮麗なたたずまいを誇るこの建物の歴史に触れてみよう。

東洋随一と謳われた西洋建築

旧台湾総督府。ここは、台湾における最高統治機関として君臨した行政庁舎である。赤煉瓦と花崗岩の白石を混用して造られ、重厚感をまとっている。高層ビルが林立する台北市だが、この建物が放つ風格は見る者すべてを圧倒している。

現在、この建物は中華民国總統府として使用されている。安定感を強調した建物で、天気恵まれば、赤煉瓦の壁面が南国の陽射しを浴びて、美しく輝く。竣工は1919（大正8）年。すでに90年という歳月を経ていることになるが、この建物の前に立ってみると、その威容が全く色褪せていないことを思い知らされる。

言うまでもなく、ここは台湾の地を支配する最



毎年10月10日に催される国慶節。中華民国の一大イベントとなっている。（2011年の様子）

高権力機関であった。言わば、日本による植民地支配の象徴とも言うべき存在である。台湾は1895（明治28）年の下関条約によって清国から割譲され、半世紀にわたって日本の統治下に置かれた。台湾総督府もこの時に設けられている。当初

は清国が行政庁舎としていた巡撫衙門と布政使司衙門を庁舎としていた。

巡撫衙門は現在の台北市警察局の場所にあり、布政使司衙門は同じく中山堂の場所にあったという。いずれも痕跡は残っていないが、石碑が建てられている。また、布政使司衙門は戦前に旧台北植物園に移設され、古蹟として保存されている。

また、この建物は戦後も引き続き台湾の行政庁舎として機能してきた事実も台湾史を見ていく上では見逃すことができない。実際、この建物は国家の



總統府全景。建築学の見地からも高い評価を受けている。台湾の歴史建築の中でも筆頭に挙げられる存在だ。



2011年の国慶節の様子。4年ぶりに軍事パレードが実施された。

象徴として扱われることが多く、毎年10月10日には中華民国最大の国家行事である国慶節（雙十節）がここで催される。

総督府庁舎の造営秘話

かつて、日本人と台湾人がいかに関わり、いかに暮らしてきたか。それを探っていく上で、建造物や土木遺産というものは、土地性と時代性を雄弁に物語っていることが多い。この庁舎の設計にも興味深いエピソードが隠されている。そのいくつかを紹介してみたい。

総督府新庁舎の設計は総督府土木局営繕課が担当した。最初に新庁舎の造営が発表されたのは1897（明治30）年のことだった。同年、台北市街の都市計画委員会が発足し、都市開発について討議が進められた。この時に新庁舎の造営も検討されている。同会が1900年に提出した都市計画案の中には新庁舎の位置が記されている。

建物のデザインは威厳を全面に押し出したものが求められた。当時、東アジア地域への進出をうかがっていた欧米列強に対し、新興国の日本はいかにして国力を誇示するかという命題に向かい合っていた。そして、総督府は敢えて、西洋古典様式を採用した。つまり、欧米のスタイルを踏襲しつつ、その中で自らの国威を誇示するという手法を追究したのである。

デザインについては公募という形でプランを

募った。これは時の民政長官・後藤新平自身の発案によるものという説が存在する。これは「台湾総督府庁舎設計競技」と名付けられ、日本において最初のコンペだったと言われている。1906（明治39）年に総督府の名で実施され、評審委員には辰野金吾、伊東忠太、塚本靖、妻木頼黄、中村遠太郎といった建築界の重鎮が名を連ねていた。

審査は二段階となっており、甲賞、乙賞、丙賞を各一名選出することとなった。第一回目の審査では、外観などの基本デザイン、そして第二回目で細部にわたる部分についての審査が実施されたという。一次審査では7名が入選を果たした。

続いて、台湾が亜熱帯性気候の土地であることや、地震多発地帯であることなどをふまえた修正案を出させ、約1年後に二次審査が行なわれた。

審査の結果、辰野金吾の愛弟子である長野宇平治の案が一等となり、片岡安の案が二等、桜井小太郎の案が三等となった。

長野宇平治は明治期における西洋古典様式の若き旗手であった。西洋の建築をその理論や精神にまで立ち返り、当時、日本ではある種の到達点を極めていた人物だった。また、日本建築士会（日本建築家協会）の初代会長も務めた。

長野は1897（明治30）年に日本銀行の技師となり、辰野金吾を顧問に迎え、銀行建築を数多く手がけた。国内では日本銀行本店の増築に関わっているほか、日銀小樽支店や広島支店、岡山支店、旧北海道銀行本店などの銀行建築を手がけている。銀行建築以外にも奈良県庁や横浜の大倉山記念館（大倉精神文化研究所）などの作品があり、明治を代表する建築家として名を馳せている。

しかし、1909（明治42）年4月22日の官報によると、最優秀案である甲賞は該当なしとされ、長野の作品は乙賞に留まった（丙賞は片岡安）。長野は時の台湾総督・佐久間左馬太に異議を申し立てたが、これは受け入れられなかった。

また、台湾総督府の側からは統治機関としての

威厳をより強調することが要求された。これを受け、同じく辰野の弟子である森山松之助によって長野案に修正が加えられた。

森山松之助は当初は、地上6階建て程度だった中央塔を9階（最頂部分は11階に相当）にまで引きあげた。これにより中央塔は高さ60メートルとなった。そして、現在のデザインが確定したのである。

長野はこの前後、わずかな間、台湾総督府の囑託技師となっているが、その後は台湾に関わることはなかった。一方、森山は総督府庁舎の設計を機に、台湾建築界の重鎮となっていく。現在、台北、台中、台南の各州庁舎など、森山が設計した三棟の州庁舎は、いずれも歴史建築として保存対象となっている。



正面大ホールの様子。竣工時に撮影された古写真。



日本統治時代に撮影された台湾総督府。戦前に発行された絵はがきから。



赤煉瓦の壁面に白帯を配する「辰野式」を踏襲した建物。戦前の絵はがきから。

恒久なる行政庁舎を設ける

この建物の敷地が決定すると、すぐに測量が実施された。起工式は1912(明治45)年6月1日に挙行されている。敷地面積は2165坪。建物は5階建てであった。言うまでもなく、当時、台湾で最も大きな建物であった。

造営は台湾総督府営繕課が担ったが、作業員はすべて日本から呼び寄せられた。当初は150万円という予算が組まれたが、これでは全く足りないということで、後に200万円に増額され、さらに後、第一次世界大戦に伴うインフレを受け、最終的には約280万円という額が費やされている。

造営の進行と管理については万全が期された。そもそも総督府の新庁舎は第5代台湾総督・佐久間左馬太の時代、「恒久なる行政庁舎」を建てることを名目に発議されたものである。つまり、当初からこの建物は永遠に使用されることが前提となっていた。

台湾は日本と同様、環太平洋造山帯にあり、地震が多い土地柄である。そのため、地耐力の調査は入念を極めたという。測量は一年近くにも及び、基礎部分を仕上げるのにも、さらに約一年の

歳月を費やしたという念の入れようだった。まさに、地震対策については、驚くほどの徹底ぶりだった。

用材については、木材は阿里山産のヒノキ材をはじめ、新竹州産のケヤキが多く用いられたという。また、鉄骨部分に鉄道用のレールを用いたとも言われている。

毎日の作業は必ず朝4時半から行なわれたという。作業は交代制で深夜まで続けられた。そのため、住民が騒音に悩まされて不眠症になったというエピソードや、時間厳守が徹底されていたため、付近一帯では時計が不要だったというエピソードも残っている。

余談になるが、この「時間厳守」の精神は、戦前育ちの台湾人がよく引き合いに出す美德観念である。台湾語には「日本精神（リップンチェンシン）」という言葉があるが、これは勤勉や誠実、信念を貫くといった意味合いで用いる。同時に、時間を守ることや約束を果たすという意味でも用いられる。



堅固な作りで知られた台湾総督府の新庁舎。永久に使用することを前提に建てられたという。

明石元二郎総督と台湾総督府

起工から3年あまりが過ぎた1915（大正4）年6月25日、主要部分の工事が完了した。そして、同日の10時半から上棟式が挙行された。中央塔の上部に棟札が掛けられた瞬間である。

建物の完成は1919（大正8）年3月であった。着工からすでに7年という歳月を経ている。この時の台湾総督は明石元二郎であった。

本題とは外れるが、明石元二郎総督の墓地にあった鳥居について、簡単に紹介しておきたい。

明石元二郎は陸軍大佐としてヨーロッパ諸国に駐在し、巨額の機密費を用いてレーニンの革命運動を支援した人物である。このロシアへの攪乱工作が結果的に日露戦争の勝利を呼び込む契機となったのは、周知の事実であろう。

1918（大正7）年6月6日、明石は第7代台湾総督に任命される。しかし、明石の在任期間は1年4ヶ月と短く、総督府竣工後、わずか半年あまりで福岡で病没している。1919年10月26日のことだった。死因はインフルエンザであった。

明石の遺体は生前に残した遺言に従い、台北市三板橋の日本人墓地に葬られた。同年10月29日に亜米利加丸で門司港から基隆に運ばれ、船は11月1日に到着。3日に総督府葬されている。その後、三板橋の共同墓地（現林森公園）に埋葬された。その後、昭和19年まで、毎年この日に墓前祭が行なわれた。

日本統治時代の半世紀、19名の総督がいたが、明石は唯一、台湾の地に永眠した人物だった。現在、その遺体は台湾の人々によって新北市三芝区に葬られている。

三板橋の共同墓地は戦後の混乱期、中国から渡ってきた下級兵士たちに占拠され、見るも無惨な状況となっていた。

私が最初にここを訪れたのは1995年のことだった。その際、バラックの奥まった場所に明石元二郎墓地があることを教えられた。行きついでみると、そこには鳥居らしきものが見えたが、これは家屋を支える柱として用いられ、物干し竿がかけられていた。そして、墳墓の上にはバラックが建てられ、柩があったと思われる場所の上には洗い場と便所が設けられていた。

その後、陳水扁市長時代の1997年、不法家屋群は撤去され、公園として整備されることとなった。明石元二郎墓地は有志の尽力によって新北市のキリスト教墓地に再建された。

また、鳥居はバラック撤去の際にも残され、台北市二二八和平紀念公園に移設された。そして、2010年12月、公園として整備された旧共同墓地に再度移設された。現在は古蹟の扱いを受けている。



三板橋の共同墓地に設けられていた明石元二郎総督墓地の鳥居。共同墓地は戦後、中国からなだれ込んできた下級兵士たちに占拠された。鳥居は一時期、台北228和平紀念公園に移設されていたが、現在は戻されている。

機能性が重視された館内

総督府の建物を眺めていると、どうしても外観ばかりに目が向いてしまうが、内部も特筆するべき点が多い。

廊下や広間には大理石が用いられ、木造部分には、阿里山で伐採されたヒノキ材がふんだんに用いられた。庁舎内の部屋数は152におよび、総督官房室のほか、内務局、文教局、財務局、殖産局、警務局などの部署があった。

庁舎内で勤務する職員は常時1000名程度はいたと言われ、出入り業者などを含めると、1500名に達していたという。完成当初は、「無駄に大きすぎるのでは」という声もあったが、支配者としての体裁を保つためには、やはり、こういった規模の建物が必要だったのだろう。

正面に立ってみると、ルネサンス様式の建物が南国らしい強い日差しに照らされている。帯状に巡らされた花崗岩の白石も、壁面にアクセントを付けているようで美しい。こういった赤煉瓦の壁面に白い石を巡らせるスタイルはビクトリアン・ゴシックの影響を受けたもので、「明治の建築王」と称される辰野金吾が好んだもの。通称「辰野式」と呼ばれるものである。

中央塔は台湾統治のシンボルと位置づけられていた。頂部には日章旗が翻っていたが、終戦を境に中華民國の青天白日滿地紅旗へと変わった。ここは長らく台北市内を一望できる場所として知られていた。

なお、上から眺めると、この建物は「日」という文字を模しているように見える。これは熱帯特有の疫病が何よりも恐れられた時代、衛生管理の観点から大型建築には必ず中庭が備えられ、採光と風通しが考慮されていたことを伝えている。こういった「日」の字型の官庁建築は旧台北市役所（現行政院）や新竹州庁（現新竹市政府）など枚挙に暇がない。

また、建物は東に向いて建てられている。そのため、東、西、南の側には直射日光を避けるための回廊が設けられているが、北側にのみ、それがない。正面から眺めると典型的なシンメトリー構造（左右対称）だが、こういった物理的環境にも適応した作りとなっていたのである。

そして、地震に対する工夫も施されていた。この建物は赤煉瓦と天然石を混用しているが、建物を支える鉄筋としてはレールが用いられた。しかも、これは自国生産したものでなく、外国から輸入したレールが用いられていた。これもまた、興味の尽きない建築秘話である。

なお、この建物の各階の四隅には喫煙室が設けられていた。設計図にもこの喫煙室は記されている。時代が時代だけに、当初は禁煙の発想が理解されず、不必要なものとして非難を受けたという。



正面大ホールの様子。特別公開日にはここも参観できる。



いくつかの部屋の取っ手には菊花の紋章が今も入っている。



館内の随所に鉄道用のレールが軸組みに使用されている。

しかし、防火対策の重要性はもちろん、構造的にもこうした個室を設けることで構造がより堅固なものとなる。そんな理由から審議が繰り返され、採用が決まったという。

徹底的な破壊は免れた総督府

竣工以来、権力の象徴として君臨したこの建物だが、やはり戦禍だけは免れることができなかった。むしろ、この建物は格好の攻撃対象となった。連合国側から見れば、この建物が倒壊することは、行政機能が停止するだけでなく、統治者である日本人、そして、被支配者である台湾人の双方へ心理的な揺さぶりをかけられる。攻撃の矢面に立たされたのは、まさに宿命だった。

1944（昭和19）年10月の空襲では中央塔が被弾した。そして、1945（昭和20）年5月31日の台北大空襲の際にも建物右翼が被弾している。後述する建築士・李重耀氏によると、この時、倒壊したのは、中央塔脇のエレベーターと階段、そしてその間にあった事務室に留まったという。しかし、燃え上がった炎を消すのには3日間を要し、火災による被害がとてもし大きかったという。

この時、館内にいた人々は地下室に避難したが、瓦礫で階段が埋まってしまい、全員が生き埋めになるという悲劇も起こった。この空襲では死者100名を数え、対家屋面積比の83%にあたる箇所が被害を受けたとされている。

それでも、こういった空爆は徹底的でなかったという風聞も存在している。

これには二つの要因が挙げられる。まずはこの建物の建築的な価値を米軍が考慮したというもの。そして、台湾が日本の支配から離れた後のことを考え、蒋介石が米軍に徹底的な破壊をしないよう伝えたというものだ。

前者については、米軍が公開している戦時中の

地図文献や戦時資料からも判断できる。後者についても、この時点で日本が国力を再生させる可能性はなく、連合国側の勝利が確実視されていたこと。そして、共産党との戦いで形勢が不利になっていた蒋介石の思惑が働いたということも想像に難くない。

そして迎えた8月15日。戦争は終結した。日本は台湾島および澎湖地区の領有権を放棄し、台湾は日本からの支配を離れた。その後、台湾は蒋介石率いる中華民国国民党政権に一時的な管理が委ねられた。

台湾総督府はこの時に「台湾省行政長官公署」と改名されている。その後、国民党が共産党との内戦に敗れ、国体そのものを台湾に移し、大混乱を引き起こしたのは周知の事実である。台北は中華民国の臨時首都となり、この建物も中華民国総統府に変わった。戦前と同様、戦後も長らく、台湾の土地と人々を統治する機関となった。



総督府を俯瞰した古写真。空襲の対象にはなっていたものの、空襲は免れることとなった。

被弾した総督府を修復した人物

終戦を迎え、台湾の社会は激変した。台湾総督府は統治機関としての機能を失い、庁舎も放置状態となっていた。戦争で疲弊しきった台湾総督府にこの建物を修繕する余裕はなく、無惨な姿のまま、残されていた。

当時、官庁建築を数多く手がけていたのは総督府土木局営繕課だったが、中華民国政府の統治下に入った後も、しばらくの間はその機能が残されていた。そのため、台湾総督府の修復も営繕課に留用された日本人技師と台湾人技師が担うことになった。

私はこの時期の様子をうかがうため、李重耀氏を訪ねた。李氏は台湾建築界の重鎮であり、総督府修繕のほか、桃園神社の保存や全国の衛生署の建築などを手がけた人物である。

李氏は1925（大正14）年、新竹州桃園郡龜山庄（現桃園區龜山郷）に生まれている。台北市の開南工業学校で建築を学び、18歳で台湾総督府財務局営繕課の技師となった。戦時中、台湾総督官邸（現台北賓館）の敷地内に設けられることとなった防空壕の設計コンペで1位となり、時の台湾総督・長谷川清に面会したこともある。

戦後は台湾行政長官公署財政處の営繕課技師として、第二高等女学校（現立法院）や台北市役所（現行政院）などの修復を担当した。そして、1946年には総督府の修復を任されることになったが、これは非常に大きな難題だったという。

これは行政長官・陳儀の命令によるものだったが、工事に到らぬところがあれば、死刑を宣告されるのは確実で、恐怖と背中合わせの毎日だったという。しかし、仕事に対する信念と、日本人技師たちから受け継いだ建築士としての誇りを胸に日々、職務に邁進したという。

実際の工事が始まったのは1947年だった。李氏によれば、最初にしなければならなかったことは館内の瓦礫を運び出すことだったという。これは牛車で約1万台分に相当した。この作業にはのべ8万の工員を要したそうで、人材の確保も困難を極めたという。

当時、李氏の立場は副主任であった。当時はどこでも見られたケースだが、上役には中華民国政府関係者が就いていた。こういった場合、多くは

意思の疎通が図れない。李氏もまた、北京語を学びながら、上司とやりとりしたという。後に、李氏は日本語、台湾語、北京語の建築用語集を執筆するが、そういった基礎はこの時期に作られたものだという。

また、当時はインフレの嵐が吹き荒れており、物価が非常に不安定だった。給金を現金でもらってもインフレが激しいため、すぐに紙くず同然になってしまう。そのため、李氏は米を確保し、給金としてこれを分配したりしたという。当時の世相を物語るエピソードである。



台湾建築界の重鎮・李重耀氏。総督府修繕の大工事を成し遂げた功績は計り知れないものがある。今も多くの尊敬を集めている人物だ。

一般公開されるようになった権力機関

現在、この建物は現役の行政庁舎であると同時に、国家が認定する古蹟でもある。館内の一部は一般開放されており、外国人旅行者でも身分を証明できるものがあれば参観は可能だ。

これまで長らく閉ざされてきた権力機関だが、時代を経て、大きな変化を迎えている。これは李登輝総統時代、強力に進められてきた「民主化」と、自らのアイデンティティが台湾にあることを人々に認識させる「本土化」の推進による産物と言えよう。

1996年1月2日、この日、第一回目の一般公開

が実現した。それ以前については1958年に蒋介石の誕生日を祝う署名場として開放されたことがあり、1975年から1991年までは毎年10月31日の蒋介石生誕記念日に銅像礼拝が行なわれていた。しかし、一般市民への公開は1996年1月2日が始めてだった。この時には41718名という記録的な数の参観希望者が集まり、入場制限も実施された。

現在は平日の午前中と年間10回の特別開放日が設けられており、参観が可能となっている（特別行事の際と警戒時は例外となる）。特別開放日には執務室やホールなども見ることができる。

参観スペースとなるのは、1階と2階の一部。ここには台湾の歩んできた道のりが理解できる常設展示のほか、社会事情や伝統芸能を紹介した企画展示がある。

館内には、台湾の各地方文化を紹介するコーナーのほか、台湾史に関する資料展示があり、「中华民国」の総統府ではあるが、同時にここが「台湾」であることを強調するかのような姿勢も見え隠れしている。陳水扁政権時代、そして馬英九政権時代と、為政者によって展示内容の傾向や扱い方が大きく変わるの台湾らしい。こうした為政者たちの意図を冷静に判断しつつ、参観を楽しみたいところだ。



総統府の中庭から見あげた中央塔の様子。建物全体が風通しを考慮した構造となっていた。

また、ここの展示物を見ていると、日本がいかに深く台湾と関わっているかを思い知らされる。半世紀にわたる日本統治時代に築かれたもの、そして、残していったものはとても挙げられる数ではないが、これらもまた、客観的な評価を下され、台湾史の一部となっている。

周知のように、台湾では戦後長らく、言論統制の時代が続いた。現在は民主化が進められ、かつ

て横行していた腐敗政治や偏向教育は過去のものとなりつつある。そんな中、客観的に日本統治時代の歴史をとらえていこうとする動きは確実に見られる。もちろん、その内容は植民地統治を肯定するような安易なものではないが、日本と台湾の関わりについて考えさせられるのは確実に言えよう。できればゆっくり時間をかけて回ってみたいところである。



市内郵便局に置かれている風景印（図案入り消印）。



特別公開日には家族連れなども多く訪れている。建築探訪は今やすっかり定着している。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ27冊。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けている。ラジオ出演のほか、台湾事情や旅行事情、台湾からの観光客誘致などをテーマに講演活動を行っている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『ワンテーマ指さし会話・台湾×鉄道』（情報センター出版局）、『台湾鉄路と日本人』（交通新聞社）、『観光コースでない台湾』（高文研）など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』（玉山社）などの著作がある。ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>